

ふくしま海洋科学館

企画展「旅する深海魚～どこで生まれてどこで育つのか～」

開催期間：2024年7月13日（土）～2025年2月24日（月・振）



【企画展の内容・目的】

- 開館以来当館で20年以上積み重ねてきた研究を基に、深海魚の生態について現在までにわかっていることや未だにわからない謎について来館者にわかりやすく紹介し、来館者の知的好奇心を呼び起こすことを目的とした。
- 深海魚は水族館で飼育されることは稀なため遠い存在に感じるが、食用になっている種は多く、実は身近に存在する生物であることを再認識してもらうことにより、それらが置かれた環境にまで関心が持てる展示やイベントを行うこととした。
- 深海魚の中には、生活史の一部を浅海で過ごす種も多く存在しており、我々の生活圏からそれほど遠くない場所で生活している。当館の「海を通して人と地球の未来を考える」理念のとおり、自然との共生のあり方を来館者、参加者と共に考える機会をつくることを目標とした。

1. 企画展示の内容

- 開催期間：2024年7月13日（土）～2025年2月24日（月・振）
- 開催場所：ふくしま海洋科学館 マリンホール及びエントランスホール
- 入場者数：418,396人



ふくしま海洋科学館 外観



企画展会場 入口



深海魚の中には、幼魚の間を浅海（浅い海）で過ごし、成長とともに深海へと移動する種やエサを食べるために浅海まで移動する種がいる。本企画展は、深海と浅海を生活の場とする深海魚を“旅する深海魚（たびうお）”と名付け、その一生をテーマとした。どこでどのように成長し、深海まで移動していくのか、これまでにわかってきた深海魚の生態と、未だに解明されていない謎を紹介するものとした。これまで当館で研究してきた深海魚をキャラクター化し、専門的な解説と併せてナビゲーターがかみ砕いて説明するパネルを設置した。会場へ誘導するため、入口にはアイキャッチとしてリュウグウノツカイの成魚の実物サイズイラストを配置した。その奥にある導入通路内は、深海についての基本的な情報を提供する場とした。企画展の副題にもなっている深海魚の生息域がどこなのかという点について、パネルで紹介した。

メインエリアの前半のテーマは「浅海での暮らし」とし、浅海における卵の孵化、稚魚の暮らしを紹介した。魚の卵には水に浮く「浮性卵」と沈む「沈性卵」があるが、今回は海水に浮く分離浮性卵をピックアップし、これまで当館の調査で得られた魚卵の写真を並べ、その多様性を紹介した。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等ではできません。



浅海で生活する種があるとはいっても、そこには様々な危険がある。生き残ることの難しさや、生き残るための生存戦略について体験することで理解できるように、ボードゲームや、遊具を設けた。ボードゲームは、卵の大きさや形による生き残る確率の違いや海中だけでなく空からの脅威などについて遊びながら学べるものとした。「クラゲライドオン」と名付けた遊具は、クラゲに身を寄せて稚魚期を送る深海魚になりきってもらうため、稚魚の帽子を用意し、子どもたちに稚魚の生態を体験してもらった。併せて、それら体験展示の目の前に実際に当館で飼育した深海魚の幼魚の映像を放映することにより理解を深めてもらった。また、成長するにつれて姿を大きく変える深海魚を紹介するため、絵合わせパズルを設けた。いずれも子どもたちのために作られているが、内容としてはこれまで研究されてきたものや当館の研究から得られた知見に基づいたものであり、大人にも興味を持っていただけるように構成した。



浅海から深海へ旅をする深海魚について、パネルで紹介するだけでなく実物を見ていただけるように水槽を設置した。深海魚は採集、飼育が難しいため展示できるとは限らないものだが、今回は期間中に挑戦的な展示ができた。アンコウの仲間のアカグツはこれまで当館で展示した中でも、最も長く展示することができた。また、卵から展示し、ふ化し稚魚となる過程も公開することができた。特にリュウグウノツカイの卵、稚魚を展示することができたことは来館者から大きな反響を呼んだ。成魚と全く違う姿を、映像や標本ではなく実物で見せることができたことは、海の神秘や不思議を感じ、知的好奇心を掻き立てるという今回の企画展の目的にかなったものであった。なぜ卵だけでリュウグウノツカイと分かったのかなど、問い合わせがあったため会場にパネルを設置するだけでなくSNSで発信するなど、海への興味を高める取り組みを行った。これまで一方的な情報配信が多かったが、新たなコミュニケーションづくりにもなったと考えられる。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。



後半のエリアは「深海よりもディープな話」として、当館でこれまで行ってきた研究について詳しく紹介した。マニアック度をディープレベルと表現し、各テーマ10～20分の動画を放映した。併せて、深海魚の研究についての研究成果と未知の領域を紹介するパネルと深海魚の幼魚の標本を展示した。特に未知の領域があることまで紹介している点が来館者の知的好奇心を掻き立てる役割を果たした。出口には、質問箱を設け、来館者からの深海魚や海に関する様々な質問が寄せられたが、その数は1516通にもものぼった。掲示した回答をじっくりと読んでいる方が多く、関心の高さがうかがえた。付帯事業では、深海魚の資源状況や海洋ごみ問題を紹介し、持続可能な資源の利用や海洋環境の保全について意識付けを図った。

【来館者の声】

- 幼魚が成長するのにクラゲに寄りそうとは知らなかった。私たち人間も自分の子だけでなく、他人の子に目を向けることも大切と思う。
- 子どもがあそびを通じて深海魚の卵や幼魚について関心が持てた。深海魚も身近な場所（浅い海）にいることがあることを知った。
- 深海の幼魚がとても小さく、実際の深海ではなかなか発見できなさそう。まだわからないことがたくさんある未知の世界だと思う。（宇宙より未知・・・）
- かわいく展示されていてみていて楽しかったです。お子さんも興味を持てると思いました。栃木県出身で海は身近な存在ではなかったのですが、展示をみていて海を大切にしなければいけないと思いました。

2. 関連事業の内容

■ 旅する深海魚クイズラリー

【開催日時】 2024年7月13日（土）～ 2025年2月24日（月・振）

【開催場所】 ふくしま海洋科学館 1階 エントランスホール

【参加者数】 5,405人

【実施内容・目的】

- 企画展の展示を見て答えるクイズラリーを実施し、正解者には展示で紹介されている深海魚が描かれた「旅する深海魚カード」をプレゼントした。
- カードに当館の研究で確認された深海魚の生態を記載したり、描かれた深海魚それぞれの卵の写真を掲載したりすることにより、生物への興味を高めることを目的とした。また、さらに詳しく知ってみたいという探求心を醸成することを目標とした。



開催場所の様子



受付の様子



クイズは毎日実施し、カードも一定期間で変更することとしていたため、定期的に参加する方がいた。クイズは2～3週間ごとに内容を変更し、参加する度に展示内容の理解が深まるようにした。図鑑で記載されているような生態だけでなく、当館の研究で確認された情報などを交えてカードで生態を紹介した。リュウグウノツカイなどメジャーな深海魚だけでなく、キチジやチゴダラなど食用になる身近な深海魚に目を向けていただくことができた。コレクションしたカードを見せてくれる来館者もあり、帰宅後も継続的な学びとなる仕組みをつくることができた。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。

■ギャラリートーク

【開催日時】2024年7月20日（土）・21日（日）11:00、14:00

【開催場所】ふくしま海洋科学館 企画展会場内

【参加者数】47人

【実施内容・目的】

- 本企画展に携わった飼育員が、展示趣旨や深海生物の採集、研究について実体験を交えて解説することにより、水族館の役割である展示、調査、保全について理解を深めてもらう。
- 海の魅力を知る飼育員が解説することにより海洋の魅力を共有し、好奇心をかき立て、観察し、想像し、実行するという海の学びにつなげることができる人材を育成することを目的とした。



ギャラリートークの様子

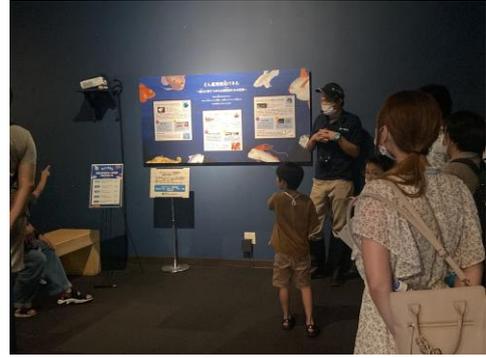


水中カメラ映像の見方を解説



今回の企画展は、“旅する深海魚”という独自の言葉を用いている。深海魚をテーマとしているが、深海よりも浅海での深海魚の暮らしが主のため一般的なイメージとは異なる。そこで、企画展に携わっている飼育員が解説するギャラリートークを実施することにより、本企画展の趣旨や深海魚の多様な生態を知っていただく機会とした。

企画展がオープンすると、夏休みということもあって子どもたちが多く来館していた。その中でも大人顔負けの深海魚についての知識を持っている子どももあり、実際に深海魚の飼育や研究をしている飼育員の話や直接聞ける機会ということで目を輝かせながら聞き入り、多くの質問を投げかけていた。



本企画展は感覚的に理解できるように、遊具を設置したが遊びに夢中になるとその意義が伝わらない可能性があるため、丁寧に説明した。本展示には、深海魚やその卵の採集のためフィールド調査を行い、未知の生態について研究し、展示に挑戦する飼育員だからこそ得られた知見も多分に含んでいる。この企画によって飼育員の仕事である調査、研究にも目を向けていただけたのではないかと感じる。また、直接対話しながら行うギャラリートークを行う中で当館としても一般の方の視点を知ることができ、双方向の学びの機会ともなった。

【来館者の声】

○いつかリュウグウノツカイの展示を見られる日が来るかもしれないと思うとワクワクした。深海のことをもっとならいたい。

○いわきで有名な魚のメヒカリを説明してくれてよかった。他の地域ではどのような魚が有名なのか知りたくなった。

○スタッフによる案内、裏話などとても興味をもてた。ディープな話も見てみようと思った。

■めざせ、最高ディープレベル！ 旅する深海魚クイズ大会

【開催日時】2024年9月15日（日）・16日（月・祝）
11:00、13:30、15:00

【開催場所】ふくしま海洋科学館 1階 マリンシアター

【参加者数】453人

【実施内容・目的】

- 企画展の内容をより深く理解していただくことを目的とする。2択クイズにすることにより、年齢を問わず参加できるようにする。
- クイズを徐々に難しくすることにより、深海生物好きの方も楽しめるようにする。また、参加者同士で対話をしながら回答することにより、海の学びを深めることの楽しさを共有する。



開催場所のマリンシアターの様子



クイズ大会問題例



企画展会場では、詳細な情報を知りたいと思う場合は、映像素材を見なければならぬが、本館の最後のコーナーのため、なかなか時間がとれない方が多い。また、解説員のスポットガイドを実施していたが、幼児の参加が多いため年齢を問わず多くの方に企画展について興味を深めていただけるよう、追加実施することとなった。

場所を館内にあるマリンシアターとすることで、写真だけでなく、映像も使用しながら進行することで飽きの来ない構成になるようにした。



問題の難易度を水深に例え、徐々にレベルが上がるようにした。2択問題としたことで子ども参加できるようにすることに加え、当館の研究で知り得た情報を取り入れることで深海魚好きや大人も楽しめるようにした。

実際に本イベントの参加者は個人、友人、家族など属性も様々で、目的の通り参加者を限定することなく実施し、海の学びを共有することができた。また、全て企画展の展示から出題し、問題も各回内容を変えていたため、参加後もう一度企画展を見たり、全問正解を目指して複数回参加したりする方がおり、学ぶ楽しさを共有することができた。

【来館者の声】

- まだまだ多くの新種が発見される未解明の世界だと感じた。
- 展示だけよりも今回のようにイベントを通じて学ぶ方が良い。海の生物が過ごせるようにゴミを捨てないような行動を広める活動が必要と思う。
- ラブカの卵の動画が良かった。初めて見ました。まだまだ知らないことがあるんだーと興味深かったです。

■移動水族館（出張授業）

【開催日時】2024年10月7日（月）～10月9日（水）

【開催場所】福島県内小中学校 3校

【参加者数】709人

【実施内容・目的】

- 水族館スタッフが学校で行う出張事業「ゲストティーチャー」として、本企画展に関連した深海魚と浅海魚の卵や幼魚（仔稚魚を含む）の生活を紹介する授業を行うことを目的とする。
- 魚類の多くは浮く性質の卵を産み、深海魚も例外ではないことを紹介することで、深海と身近な浅い海は密接な関係があることを理解することを目的とする。



主に学校の体育館で実施した



レクチャーの様子



成魚と卵の液浸標本を用意し、成魚の大きさと卵の大きさは種によって異なり、体の大きさに比例しないことや、種によって卵の特徴が異なることを卵の拡大写真を使用して細部を観察できるようにした。選定した魚種は身近な種としてミナミメダカ、福島で馴染の深海魚メヒカリ（アオメエソ）、リュウグウノツカイの仲間のアカマンボウ、魚類の中では大きい浮く卵を産むウナギ目（ウツボの仲間）を用意し、表に卵、裏に成魚の写真を入れたファイルを自分で裏返して見ることで想像する意欲や、理解した際の驚きを強調させた。食用にされる身近な魚卵を紹介することで、多種多様な魚類の生活史についての興味を引き出す内容とした。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。



実際に卵や仔稚魚の採集を行うプランクトンネットを用いて、目の細かさや、素材、形状を体感するとともに、広大な海で漂う卵や仔稚魚の調査について紹介した。魚卵の多くは1～2mmであるため、ネットの大きさと比較することで調査の難しさや、一見透明な海にも目に見えないほど小さな生き物が存在し、その生き物の餌となる生き物が存在することを学ぶ機会とした。



また、採集方法や卵と仔稚魚の暮らしを解説することで、多くの魚類が浮く性質を持つ卵であることや、深海魚も例外ではなく、卵が海面付近まで浮上し、浅海種と同様に浅い海でプランクトン生活を送ることを知る機会とし、身近な生き物や、深海魚の生活環を知ることによって身近な海洋環境と深海の環境への興味を深める内容とした。

また移動水族館事業では、タッチプールで磯の生き物の体のつくりを紹介し、生き物の命の大切さを伝えたり、海洋ごみ問題についてクラスメイトと共に考えたりする機会を提供し、問題解決に向けて行動できる人材の育成を図った。

【来館者の声】

- 海にこんな生きものがあることをしらなかった。
- 卵の展示でアカマンボウの展示が良かった。たくさんの卵が海の上に上がってうかんでいると分かった。そして何より卵がかわいい！（アカマンボウ）海大好き！
- ごみは深海にも到達してしまうということ、人のせいで他の動物にも被害がおよんでしまうこと。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はいけません。

■魚屋さんの深海魚 新潟の魚 VS いわきの魚

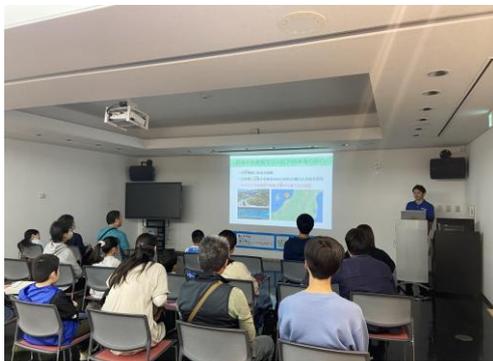
【開催日時】 2024年10月26日（土）10:00~12:30

【開催場所】 ふくしま海洋科学館 1階 アクアルーム1、2

【参加者数】 18人

【実施内容・目的】

- スーパーや魚屋さんで見られる身近な深海魚の生態を紹介する企画。水族館の飼育員が、深海魚の生態を解説し、市場関係者から魚の地方名と食べ方などを説明し試食会も行った。
- 深海魚を身近に感じ生態や体の構造について関心を持つようにすると共に、漁業の持続可能性や環境についても関心を持つことができるようにすることを目的とした。



開催場所のアクアルームの様子



アカムツについての講演の様子



“旅する深海魚”のうち、スーパーや魚屋さんで見られる身近な深海魚について紹介するトークイベントを実施した。北陸地方で獲られるアカムツは「のどぐろ」と呼ばれ、その希少性から高級魚として名をはせており、特に脂がのった新潟産は新潟を代表する魚のひとつといわれている。一方、「メヒカリ」と呼ばれるアオメエソは、いわき市では家庭の食卓に並ぶ身近な魚で、いわき市の魚にも制定されている。

どちらの魚も地元の人々にとっては身近であるが、深海魚であるそれらの生態は謎に包まれている。そこで、それぞれの地の水族館の職員が、のどぐろとメヒカリの生態解明及び展示への取り組みについて紹介した。



アカムツについては、通称でのどぐろと呼ばれる所以から、安定的な展示のための卵、稚魚の育成の取り組みとその課題などについて新潟市水族館マリニピア日本海の新田誠氏より解説があった。今回の企画展の発案者である当館の飼育員石井輪太郎からは、アオメエソの研究について解説した。アオメエソは繁殖生態など謎の多い魚であるが、当館では展示に成功している。2022年に飼育していたメヒカリから卵が見つかったことなど、水族館で飼育していたからこそ得られた発見を紹介した。参加者は身近であるが未だに謎の多い深海魚の生態解明に挑む話しかから、疑問を持つという視点や研究の難しさを感じていたようだった。今回は、魚食普及に取り組む「いわき魚塾」の方に「食」の観点から講演を依頼した。市場で「のどぐろ」、「メヒカリ」と呼ばれる魚でも、実は種が違うことにはざわめきが起きるほどであった。また海水温上昇などによる漁獲量の変化などを解説した。



講演会後の試食会ではそれぞれの地方の「のどぐろ」と「メヒカリ」の食べ比べをしていただいた。また、魚をくまなく観察していただくため、市場から取り寄せた魚のタッチコーナーを設ける他に、魚をさばき、体のつくりを参加者に見ていただいた。食文化と飼育研究を繋げながら「講演」というスタイルだけでなく様々なアプローチを実践できたことは今後にも生かしていきたい。

【来館者の声】

- メヒカリのなぞがおもしろかったです。なぞがわかる日が来たらいいです。
- 深海にいる魚たちは環境に適した機能を持っていることがわかりました。
- 離れた地域の海でも共通していること、異なることがあるんだと2つの地域の深海魚のお話を同時にきいたことで実感することができました。試食もおいしかったです。いわき魚塾の鈴木さんのお話で、水族館と私たちの生活をつなげることができました。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等ではできません。

■ 深海をのぞけ！ ROV で撮影した深海生物！

【開催日時】 2024年11月2日（土） 10:30~12:00

【開催場所】 ふくしま海洋科学館 1階 マリンシアター

【参加者数】 62人

【実施内容・目的】

- 高知県室戸沖の水深 800mの深海に、遠隔操作型無人探査機を潜航させた映像を見ながら、深海に生息する生物について紹介するトークイベントを実施した。
- 研究者ならではの実体験を交えた話を聞くことにより、海や生物への興味が深まり、得られた知識を他者と共有したり、海の環境を守ろうとする意識を芽生えさせたりすることを目的とした。



開催場所のマリンシアターの様子



トークショーの様子



当館では、ROV（遠隔操作型無人探査機）を活用し深海生物の調査や採集を行っている。本イベントでは、共同調査を行っている黒潮生物研究所の戸篠祥氏と当館の調査の際 ROV の操作を担当している山内信弥が ROV で撮影された生物について解説した。魚類をはじめとする生物の中には、浅い海と深海を移動する（旅する）種類が存在するが、旅する生物は魚類だけではなく、たくさんの刺胞を持つクラゲも含まれる。今回紹介した深海の映像の中にはクラゲを含め多様な生き物が登場したが、潜航する映像を時々ストップさせながらクイズを出したり、参加者の質問に答えたりしながら対話形式で進化した。



今回のトークショーで上映した深海の映像は非常にクリアで、専門家も初めて見る種や凶鑑や標本でしか見ることができないような生き物が動いている様子を大画面で見ることができたため、参加者が感嘆していた。自然界での群生の様子など、凶鑑だけでは知り得ない情報を得たことで、海への関心が更に深まった様子だった。映像には生き物と共に海洋ごみが沈んでいる様子も映っており、この問題の深刻さも伝わったようだ。



また、このようなイベントでは、遠慮して大人が質問しないことが多いが、子どもたちの知識が非常に深かったため大人からも遠慮なく質問があり、活発なトークショーとなった。講演会終了後は参加者にステージに集まっていただき、当館と黒潮生物研究所からお持ちいただいた標本を間近で観察していただき、講演者が質問に答えた。共同研究を行っている二者がそれぞれの視点で深海について話をするることにより、参加者にも多角的な視点を持っていただけたのではないかと思います。会場で出た質問からも新たな視点を心得、終了後も海の学びを共有している様子が見られた。

【来館者の声】

- クイズが楽しかったです。子どもたちが詳しくて良かったです。まだまだ未知の世界なのでこれからが楽しみです、人の手が入らず秘密のままでいてほしいとも思います。
- ROV 映像が実際みられて貴重な時間でした。メンダコがとてもかわいかったです。
- プラごみはしぶとく残ってしまうのでゴミ削減にも視点を置いていきたいです。そして深海はまだまだ解明されていないことが多くロマンがあって素敵だなと思いました。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。

■旅する深海魚展示解説

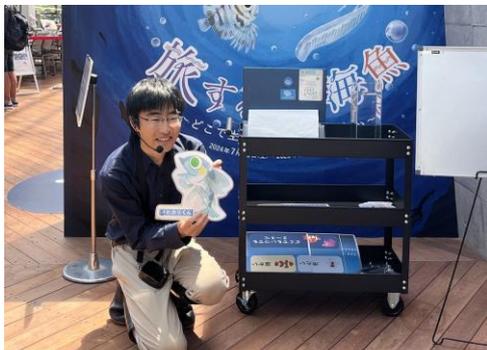
【開催日時】2024年7月13日（土）～2025年2月24日（月・祝）
主に土日祝日開催

【開催場所】ふくしま海洋科学館 1階 企画展会場

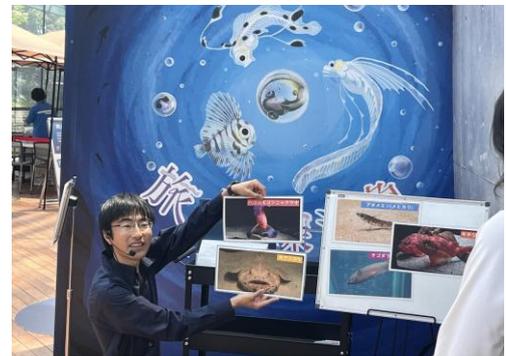
【参加者数】約1,200人

【実施内容・目的】

- 企画展会場内に解説コーナーを設け、パネルを読むだけでは難しい深海魚の生息環境や深海魚の生態について当館解説員が、映像や実験を通して説明を行うことにより実感を持って理解できるようにする。
- 解説員が参加者からの疑問を収集し、フィードバックを行うことにより、解説する側も海の学びの可能性について考えを深めることができる。



開催場所の様子



展示している深海魚の紹介の様子



企画展会場では、パネルや映像、実物を展示し、“旅する深海魚”を紹介しているが、今回はそのテーマから浅海での「深海魚」の解説が主になっている。そのため、深海とはどのようなところなのか、という説明については十分ではない。そこで深海についての入門編として解説を行った。今回の企画展のナビゲーターとなっているメヒカリ（めひかりくん）、ドンコ（どんこねえ）、キチジ（きちじい）のモデルとなった深海魚をはじめ、当館で展示している深海魚を紹介した。

解説には、当館の飼育員が撮影した水中映像を用い明るさ、水温を紹介した。また水圧実験を参加者にしてもらい、深海の水圧の高さを感じてもらった。人間からすると過酷とも思える環境の中で生きている深海魚の体の特徴について実験を交えて紹介した。

企画展開幕当初は展示室内が混雑し、解説の声も届かないため、展示エリア外で行ったり、落ち着いて解説が聞けるよう、クラゲの遊具の上で聞いてもらったりするなど様子を見ながら実施した。プログラムの参加者は幼児が多く、想定よりもかなり低い年齢であった。実験や映像を交えたことで楽しんでいる子どももいたが、30分という長時間のプログラムだったため来館者数が落ち着いてくる秋以降はスポットガイド形式に変更し随時解説を行った。

解説プログラムを企画展開催期間中に定期的実施することで、企画展の内容をさらに充実させることができた。それはこれまでの企画展では実現できなかったものである。展示解説員がいることにより、来館者とのコミュニケーションが活発になり、それを逐次解説や展示にフィードバックするというモデルケースを作ることができたことは、当館としても大きな収穫となった。

【来館者の声】

- 深海でくらくて、つぶれるのがふしぎだと感じました。
- 深海はよくわからないことが多いと聞いたことはあっても、10km以上の深さがある場所のことや200m～が深海ということなど初めてしっかり聞いて「じゃあ知らないことも多いよな」と興味がわきました。
- 日頃接することが無い深海魚について知ることができ、海の大切さも知ることができた。

【事業全体のまとめ】

深海魚の企画展は数多くあるが、本企画展では深海と浅海を生活の場とする深海魚をテーマとした。一般的なイメージとは異なる深海魚の企画展のため、展示だけに頼らず、人を介して様々なアプローチを行った。

本企画展での最も大きな成果は、期間中にリュウグウノツカイやチゴダラなど、深海魚の成長を卵の段階から見ていただけたことである。これまで研究者しか目にできなかった姿を一般の方が見て写真や動画を撮影し、SNSで成長過程をアップし、多くの方にその様子が共有されたことは、シチズンサイエンスとしての機能を果たしたといえる。

出口には質問箱を設け回答を掲示したが、立ち止まってじっくり読んでいる来館者が多かった。海の学びが多くの方に共有されていた。これらの取り組みは来館者の学びになるだけでなく、当館としても一般の方の目線を知る良い機会となった。

飼育員が経験してきた未知の世界を切り開くことの楽しさを、来館者やその家族、SNSを見た人まで、多くの方に知っていただくことができた。そして、生き物の生息環境に興味を持ち、守りたいという気持ちを醸成することができた。当館の「海を通して人と地球の未来を考える」理念のとおり、自然との共生のあり方を多くの方々と共に考える機会となった。

3. 主な連携・協力先について

連携・協力先名称	連携・協力の内容
1. 東海大学海洋科学博物館	ラブカ研究プロジェクト映像提供
2. 新潟市水族館マリニピア日本海	トークイベント「魚屋さんの深海魚」講演
3. いわき魚塾	トークイベント「魚屋さんの深海魚」講演、料理提供
4. 黒潮生物研究所	トークショー「深海をのぞけ！ROVで撮影した深海生物」出演
5. 観音崎自然史博物館	標本貸与

4. 主な広報結果について

掲載媒体名	見出し、掲載日
1. 産経新聞 茨城版	「よかっぺ飼育日記」、6月21日
2. 福島民報	「深海の一生わかりやすく」、7月8日
3. いわき民報	「深海魚テーマの企画展開幕」、7月13日
4. 福島民友	「『謎』迫ろう アクアマリンで企画展」、7月22日
5. 福島中央テレビ	ゴジテレ Chu!、7月24日
6. NHK 福島放送局	はまなかあいづ TODAY、8月13日
7. 福島放送	ステップ、8月14日
8. 福島中央テレビ	おしえてキビタン!、8月28日
9. NHK 福島放送局	はまなかあいづ TODAY、12月4日

以上